大原特別集会

# レプタ二つ
## ――マルコ伝第12章41～44節――

１９６４年11月23日
小池辰雄

聖書は神のドラマ　己を棄てて　煩悩は身に添える影　己を棄てて　煩悩は身に添える影　天国に入る門　十字架の門に体当たり　あるがままそのまま　キリストの言の前に降参　光となり水となる　楽しい世界　分裂のないこと　一切の秘訣を得たり

**【マルコ12・41～44】**

**41イエス賽銭函に対いて坐し、群衆の銭を賽銭函に投げ入るるを見給う。富める多くの者は、多く投げ入れしが、42一人の貧しき寡婦きたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。43イエス弟子たちを呼び寄せて言い給う『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽銭函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れり。44凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料をことごとく投げ入れたればなり』**

### ●聖書は神のドラマ

皆さん、よくいらっしゃいました。新しい方もいらっしゃるようなので申し上げておきますが、聖書は、研究しようと思ったり、頭で分かろうと思ったり、そういった角度でいくらこれに当たってもダメです。もし、そういう角度で聖書というものを勉強なさろうとするならば――それは聖書をひとつの古典として扱っているから――聖書が与えようとしている一番大事なものは、これは何年たっても受けとれない。そういうことをはっきり申し上げておきます。

聖書は、神さまが私たちに事実をもって語りかかり、また事実を通して掴みかかってきたところの、神の現実の展開してくるところのドラマです。その中に自分を投げ入れて、全身をもってこれにぶつかるという角度でこれにお当たりにならないと、この聖書は、いくら教会や集会に通いましても、さきほど申しましたような気持で来ましたならば、それはいたずらですので、始めから聖書に対することはやめた方がいい。この世の勉強をなさった方がよろしいと――私はずいぶん激しいことを言いますが――申し上げておきます。

イエスの言葉は非常に激しい。「福音」と申しますが、実は生まれつきの私たちには、と

ても耐えられない言葉です。キリストは、私たちの生まれつきの知情意ではとても耐えられないところの凄い言葉と事実をもって臨んでこられた。それで、一人残らずこれに躓いた。彼はただ独り十字架にかかりました。福音と、我々この世というものは、実はそれほど恐ろしい正面衝突をする。それほど恐ろしい躓きである。それが非常に水を割られてしまって、いわゆる文化的にされているわけです。

明日は、私は「文化の根底としての福音」という題でお話しいたしますが、福音というものは一応、文化とは絶対対立をするようなものです。

**「私の名のためにすべての人に憎まれる」**

なんていうことをキリストは言われる。ところが、その対立しているところの文化というものを本当に活かすものはこの福音であるということを、明日お話しいたしますけれども。

そういったようなものであって、文化的な角度からこれに向かって、

「分かるの分からないの」

と言って、

「もし、分からなければ、福音はやめよう」

と言うなら、これは分かりっこない。初めから、

「分かりませんから、おやめなさい」

と私は言いたい。それでは、

「一体、どのようにしてこれに向かっていくのか」

ということです。

キリストが問題にされている一番の中心は、人間の生命の問題です。生命が本当の生命であるか。あるいは、過ぎ行くものであるか。誰が、人間が他の人に本当の生命を与えることができるか。誰も、本当の生命を与えることは、どんな学者も、どんな文豪も、どんなお医者さんも、これはできない。何者も与えることのできないものを、唯だ一つの最も根底的なものを、キリストは与える。私たちはこれを無条件に受けとる。自分の判断でもない。無条件に受けとるということでなければ、この世界には入れないというような、恐ろしくてまた驚くべき絶対恩寵というものが、この福音の福音たるゆえんなのです。そういうイエスが来られて、彼は己の生命を本当に分け与えんとされた。事実、分け与えて、地の極までも世の末に至るまでも、キリストの生命は限りなく分け与えられていくところのものである。そういうのが福音の本質です。

## ●己を棄てて

今日はマタイ伝16章の、

「**己（おのれ）を棄てて己（おの）が十字架を負いて我に従え**」

ということを、この集会のスローガンとします。午前は、

**「己を棄てて」**

というこのただ一句のみに集中したい。この「己を棄て」ということがなければ、

**「己が十字架を負う」**

ということができない。「己を棄て」ということは、どこで学んでもよろしいが、今、読んだマルコ伝12章の寡婦のお話から――話と言っても、これは事実ですが――学びとりたいと思う。

イエスは賽銭箱に向かってじっと見ておられた。聖書は、そういうドラマですから、そういう光景を想い浮かべてください。神殿の賽銭箱です。

ある時は、お賽銭を見て、

**「この貨幣には一体、何が描いてあるか。カイザルの顔である。カイザルのものはカイザルに、神のものは神に納めよ」**

と言われたことがあります。

金持ちは、金が多くあるから、割合に惜しみなくお賽銭を投げていたが、しかし、そこに貧しい寡婦が来て、レプタ二枚を投げ入れた。私たちの昔の概念でいうと五厘ほどです。これは貧しさのどん底です。昔は、大福一つ、三角形の袋の中に入った南京豆一袋が、私の小さい時の五厘だとか一銭だとかで買えました。そういう貧しいレプタ二つですが、それを投げ入れてしまった。そして、イエスは特に弟子たちを呼び寄せて、

**「よく聴け」**

と言われた。

**「あの貧しい寡婦は、賽銭箱に投げ入れている人たちの中で誰よりもたくさん入れた。みんなは有り余る中から入れたが、あの婦人はその乏しい中から自分の一切を、その全生活費を投げ入れた」**

と。もう、明日の生活もわからない。自分の持っているものをそこでみんな投げてしまった。これはできない。私も、この寡婦の前に降参です。

イエスはじっと見ておられた。その寡婦は自分の全財産をそこに投じてしまった。とにかく、今持ち金全部を投じてしまった。これは普通の人からみれば、よっぽど馬鹿です。明日のことをどうするかというわけで、普通の判断を超えている。

「己を棄て」というのは、寡婦はこの大事な自分の生活の料(しろ)を投げ入れた。それは即ち、自分を棄てている。その生活の料において実は、お金を投げ棄てたのではなくて、自分自身をそこに投げかけている。

一体、何のためにそんなことをその寡婦はしたのでしょうか。どういう願いがあったのか。お賽銭ですから、相手は神殿ですから、ただそこらの路傍に棄てるのではない。何か願いがあって、これは棄てているわけです。自分が本当に願うその願いが、とにかく生命賭けで、

「明日のこともわからん、けれども私はあなたにお願いする」

と言って、自分を神さまの中に投げ入れる。自分を神さまの中に投げ入れて、そこで求めることは、自分の生命そのものを、どうにもならないこの生命そのものを本当の生命にしていくこと。そういうわけで、この寡婦が投げ入れたときに、その願いは生命に賭けて願っている。エレミヤ記30章に、

**「生命を賭けて近づく者あらんや」**

という句があるが、正にその事態です。即ち、生命賭けの賽銭の投げ入れです。このことは実は宗教の、私たちの死ぬか生きるかの関門なんです。キリストはやはり、その生命の転換、死ぬか生きるかの転換を、この寡婦の姿において見られた。

私たちがこの聖書を読んで、こういった一つの場面にぶつかって本当に――「分かるの分からないの」ではない――この寡婦の姿に自分がなれるか。なれないのはどうしてかと。それは本当に求むべきものを求めていないからです。本当に求むべきものを求めているならば、自分自身をそこに投げかけるはずです。自分をこっち側に置いて、求めているのは、何か物を求めている。一番大事なもの、これは何といっても生命である。我々はどんな素晴らしい物を持っていても、

「お前はその物と生命とどちらが貴いか」

と言われたら、誰でも無条件に己の生命を惜しむにちがいない。生命賭けでこの賽銭を、これを全部投げかけたというのは、明日の生命も知らないような意味において、気合においてこれを投げかけた。

## ●煩悩は身に添える影

自分は一体、何を問題にしているんだろうかと。結婚問題であろうか、就職問題であろうか。また、学問上の問題であろうか、家庭の問題であろうか。いろいろ、皆さんは問題がおありなわけです。けれども、そのような問題を本当の解決に至らしめるところのものはもはや、「分かるの分からないの」ということではない。

「キリスト教は、私たちの判断を満足させてくれるものなら入りましょう」

というような角度の若い方々が非常に多いわけです。

「あんなのなら、よそう」

とか。

「神さまが在るのに、こんな不合理な世の中だというのはどういうことか」

とか、みんな頭で分かろうとしている。これは解決がつかない。人生は矛盾だらけ、不合理だらけです。けれども、その矛盾、不合理は一体誰がもたらしているか。これは人間そのものが結局、もたらしている。この人間そのものが一番、自分自身が片がつかない。自分自身が本当に片がつく世界をこの福音は根底から、自分自身をひっくり返して、それを与えようとしているのがこの福音です。私たちは、この寡婦と同じように、自分を神の前に、

いや実に神の中に棄てる。己を棄てる。

これは法然の言葉ですが、

「煩悩は身に添えるところの影である。いくら去らしめようとしても、それを去らせることができない」

という。あの親鸞の先生の法然が煩悩から解脱しようと思ってもこれはできない。ちょうど、私たちがこうやって坐ったり立ったりしていると、どこかに自分の影が出ているようなわけです。また、「菩提」という本当に救われた悟りの姿は、

「菩提は水に浮かべる月であって、いくら取ろうとしても取ることができない」

水に浮かんでいる月は、どうやって取ろうとしても取れない。この法然の、

「煩悩は身に添える影、去らしめんとすれども去らず。菩提は水に浮かべる月、取らんとしても取り得ず」

という、この難題をどのようにして解決しますか。

キリストは、「己を棄てて」と端的におっしゃる。キリストという方は説明をなさらない。また、方法をあまり言われない。断言命法でそこに投じだしている。ちょっとやはり禅宗の坊主みたいなところがありますよ、キリストの言葉というのは。聖書を見ていると、キリストと他の者が問答しているのを見ると、ちぐはぐです。みんな、分からない。キリストは、

**「我を食らえ」**

なんて言って、

「『我を食らえ』とはこういうことである」

なんて説明しないものだから、皆は

**「あの人は自分を食らえと言うけれども、どうして食べられるか」**

とか、

**「『人新たに生まれずば』と言うが、またお母さんの中に入れるか」**

なんて言っている。先程、コリント前書2章を読んでいただきましたが、

「神の言は神の霊の中に入らなければ、それは受けとれない」

という。

「いや、困ったな。そういうことを言われたら、求めているのに、初めから次元の違うことを言われては、どうにもならんじゃないか」

なんて思う。正直、どうにもならんですよね。だから、いくら何年、教会に通いましても、なかなか入れない。

## ●天国に入る門

私は「無教会」という畑に育ちました。内村鑑三という先生について、初めから私は感

激してしまった。それで、かなりどうかなっているようなつもりだったけれども、あるところにきたらば――信仰のすじはいい。内村鑑三、藤井武、塚本虎二なんていう先生方について学びました。それぞれ、先生方は素晴らしい器でした――けれども、心までは非常に満たされてくるんだが、どうも何かまだベールがとれない。それが、あるときから祈りの世界で突破したわけです。

しかし、その祈りの世界の突破は、どこがその関門であったかというと、このキリストの十字架であった。

**「我は門なり」**

とキリストは言われた。キリストが「我は門なり」とおっしゃったのは、どこへ入る門か。言うまでもなく、天国に入る門です。神の国に入る門。

「私がその門である」

と、そこに定冠詞がついている。キリストという門は、それでは具体的には何かと思ったら、十字架であった。十字架というこの関門を通らなければ入れない。また、その十字架という門には、扉がちゃんとある。その扉に体当たりしなければ。ノックくらいではダメだ。これは体当たりしてぶっ倒れなければ、開かれない。

「どれくらいの力を使って、どういうように鍵を回したら、開くか」

なんていうものではない。鍵も何もいらない。どんな鍵を持ってきても開きませんよ、これは。体当たりしたらば、その十字架という門は開かれて、

「さあ、お入りなさい。来なさい」

と言われる。

**「己を棄てる」**

というが、神さまの中に、キリストの中に棄てようとしても、これは棄てられないんです。さっき言った、

「煩悩は身に添う影である」

という。己というものは煩悩の中心なんだから。いろいろな煩悩はあるけれども、煩悩の中心の「自我」というやつが煩悩の根っこなんだ。この自我というやつが本当に棄てられれば、煩悩は棄てられるわけです。どうにも影がとれない。私たちは死に至るまで、この影はとれない。

影はとれないけれども、影のとれる道がある。この自我という「己を棄て」というのは、キリストが実は十字架で、キリストが自らの十字架で己を棄てた。パウロが

**「十字架の他は語るまじと思う」**

と言うように。

御霊に満ちているイエスという方はいきなり天界に昇ってさしつかえないキリストでした。今の人にはわからん世界だね、肉体が完全に霊化してしまって、天界へ昇ることので

きる本当の霊人でした。それがその道をとらず、神さまに、

「**汝は十字架にかかれ**」

と言われた。

「**我自ら棄つるなり。また自ら得るなり**」

とキリストはヨハネ伝で言っておられる。みんなが十字架に架けたのではない。もちろん、それは相対的現実としては、寄ってたかってキリストを十字架に架けてしまう。ローマの兵隊、祭司・学者・パリサイ人、ついには民衆もこれに同じてしまって、

「**バラバを免(ゆる)して、キリストを十字架にかけろ**」

なんて言って大騒ぎした。けれども、あんなご連中がいくら大騒ぎしたって、キリストは、架からないと思えば何でもない。けれども、キリストはあの背きに対して、

「背きを私は全部引きうける」

と。神に逆らうところの、悪の霊どもの手下になっているご連中の、この反逆を全部、あの罪も受ける。実は、それは聖霊に逆らっている罪です。

「**聖霊に逆らう罪は赦されない**」

という、その罪を全部引きうける。

## ●十字架の門に体当たり

自分で自分の自我が棄てられない。煩悩が棄てられない。

「**罪の価は死なり**」

とパウロが言っている。

「これはみんな私が引きうける。お前たちは当然、死を受けとる者であるが、この死を受けとるところの罪そのものを全部、自我そのものを、棄てようとして棄てることのできないものを、私が全部引き受ける」

というわけです。

あの富める青年が――この寡婦とは全然、正反対です――モーセの十誡をとにかく一応よく守っている。品行方正な青年である。キリストが、

「**本当にお前は感心だ。けれども、ただ一つのことを欠くよ**」

と言われた。その富んでいる富において自分の心が富んでいる。だから、

「富を棄てろ」

と言われたときに、富が棄てられないで、すごすごと去って行った。これは即ち、富において己を惜しんでいる。やはり、己を棄てることができない。

私たちはみな、それぞれの才能、能力、地位、財産、いろんなものにおいて自分を惜しんでいる。これが棄てられない。

「自分の判断も、人間の知情意も、とにかく神さまの前に一遍、自己もろともに棄

てろ」

なんて言うのですから、ずいぶんこれは乱暴なものですよね、福音というのはちょっと考えると。けれども、

「それでは、棄てないでやってごらん。本当の世界に行けるかい。問題なき人になって、本当に人を幸いにすることができて、そのような本当に喜ばしい、神さまに喜ばれる人になれるならなってごらん」

と。未だかつてそれができた人は一人もいない。事実が証明する。相対的には、それはいくらでも善いということが言えるけれども、神さまの前に本当に置かれ、そして、自分が本当にそういう神の人であるということが果たして手放しで言えるか。

そうすると、道はもう、「分かる分からない」でなく、

「棄てるか、棄てないか」

というこの一事にかかってくる。この一事にかかって、それを棄てることができないから、

「私がお前の代わりに棄てたんだぞ」

というのがこの十字架である。もう、絶対無条件にこれを受けとる他に道がない。他に道がない。選ぶも選ばないもない。決意もへったくれもない。

この頃よく、

「信仰は決意によって。分かる世界ではないから、まず決意しなくては」

なんて、キリスト教会で「決意」ということを言っている。「決断」だとか。一面、それは決断でもありましょうけれども、人間的な決断では絶対にない。追い詰められて、どうにも、にっちもさっちもいかなくて、そして、ぶっ倒れなければ、これは入れない。これは決断ではない。

「もう、私はどの道も行けません。八方塞がりです」

と言って、十字架の門に来て、そして、十字架の門に体当たりして、

「どうにもなりません」

と言って、倒れてみたらば実は、

「私は、そのどうにもならないお前のために、門は開いてあるんだ」

と。門は開かれてある。当たってみたらば、門は開かれてあった。当たった自分の力で開いたのではない。ぶつかってみたらば、気がついてみたら、既に開いてあった。

**「汝を既に贖いとってしまったぞ」**

と。あのヘブル書10章にあるとおりです。その贖いは事実、ただ一回、完了してある。二千年前にかの十字架において、キリストの絶対恩寵の事実が、キリストの十字架という無言の事実の言葉が迫ってきている。パウロが言うこの

**「十字架の言（ことば）」**

とは、「言」と言っても、いわゆる言葉ではない。言葉は直ちに行であり、直ちに力です。

十字架という表現です。神さまの恩寵の体現です。これが私たちを本当に、突破しようとして突破できないところの事態に私たちを入れる。私たちを入れて、引っ張っていく。

「さあ、入れ」

と。絶対無条件にです。これに何か条件づけて、

「まだ、私は頑なですから。まだ、私の信仰は弱いから。まだ、私は聖書をよく読んでいないから。まだ、人を愛していないから」

なんて、何を言っているか。そんなものはひとつもいらん。

## ●あるがままそのまま

どうか、皆さん、このキリストの恩寵の世界は、

「幼児の如くそのまま入ってこい」

という。人間というものは、くすんでいるいろんなかさぶたがかかっているんだ。

「そんなものは取ったりしなくていい、そのままでいいから入って来い」

と。

「少し精神を統一してから。もう少し分裂をやめてから。もう少しこういう問題が解決してから。まだどうにもならないこういう問題がありますから、ちょっとお待ちください」

なんて、そんなことではひとつもない。

「みんな、あるがまま、行き詰まりのまま、悩みのまま、分裂のまま、そのまま来い。あるがままで、そのまま来てごらん。私は、それは全部引きうけてある。十字架の門を入って来たら、門のこちら側は光輝く世界である。そちらは闇と混沌であるが、こちらは光輝く世界だ」

と。初めは眩くて目が見えない。

パウロが、この復活のキリストにぶつかって、昼間の太陽よりか素晴らしい光にぶつかって、あの使徒行伝9章に書いてあるとおり、天来の光に照らされてぶっ倒れてしまった。ぶっ倒されたパウロは本当に、

**「目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えず」**

というわけでしょ。アナニヤという人にちゃんと示しがきている。

**「彼に按手してやれ」**

と。聖霊の按手を受けて、パウロは、

**「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」**

と、心眼が開かれた。

私たちの両眼の中間に心眼がある。この心眼が本当に開かれる。深く祈っていると、眉間のあたりがむずむずしたり、そこに光が射してきたりすることがある。心眼があって―

―それはどこだっていいですよ、私は何も妙なことを言っているのではない――我々の存在の中に心眼が開かれる。そして、魂の眼が開かれる。心の眼が開かれるということはどういうことかというと、そこに神の、キリストの霊が臨んでくることです。十字架されてみて、そして、

「神さま！　主さま！」

と叫ぶ。ちょうど、仏教の世界で

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

と本当に称えれば、そこの世界に坊さんたちは入ったように。

私たちは、本当にキリストの世界で

「主よ、神よ」

と称えれば、その世界に入る。パウロにとっては、「神よ」と言おうが、「主よ」と言おうが、「キリストよ」と言おうが、「御霊よ」と言おうが、パウロの言葉はみんな離すことはできない。もうこの三つは絶対、離せられない。「三位一体」なんて、神学でも何でもない。あれはもう事実なんです。

私たちはすっかり自我がすっ飛ばされたら、御霊の生命が、聖霊の生命が私たちの中に入ってくる。

「ああ、今まで、何を求めていたか」

と。これが本当に、

「**求めよ、さらば与えられん**」

ということです。

## ●キリストの言の前に降参

「レプタ二つ」を投げ出したこの寡婦が何を祈ったかは、そこには書いてない。けれども、この棄身で願った彼女には、何よりも命賭けで、神殿の中に命を棄てたから、本当に生命をそこで得たはずです。

「**天国は商人のようなものだ。持てるものをみんな売ってしまって、一番素晴らしい真珠を買おうとする商人のようなものだ**」

という。キリストの言葉はどれをもってきたって、全部同じです。天国はその真珠のごとしと。一切を棄てて、唯だ一つの真珠を得ようとする。それが本当の素晴らしい商人だという。

昔の侍は陋屋（さむらい　ろうおく）に住んでいても、日本刀はもの凄い、一番素晴らしい日本刀を得ようとしている。学者は第一流の本を本当につかまえて、それによって没頭しようとする。

畑にある宝を見つけて、その宝を何とかして得ようとしている。一番中心となるものは、

根底となるものは、このキリストの生命です。「叩けよ」も、「求めよ」も、「尋ねよ」も結局、内容はみなイエス・キリストです。神の現象体であるキリストである。

「神さまはどこにあるか？」

なんて言ったって、いくら捜したって、出てきはしませんよ。イエス・キリストにおいて現象したところの、

**「我を見し者は父を見しなり」**

という、このキリストの言の前に降参して、

「はいっ、あなたのところへ行きます」

と、こう言う人でなければ、福音の中には入れない。

イエス・キリストは、「我を見し者は父を見しなり」というその「我」というキリストは、

**「自分は何ものでもない」**

と言われた。

**「私は何もできない。何も言えない。ちょっとも善くはない。神さまだけだ」**

と。彼は本当に神の中に己を棄てた人です。イエス・キリストは神の中に本当に己を棄てた。いつも申し上げているとおり、キリストの言葉は全部、自己の告白です。彼の大告白です。己を棄てた。自分は本当に神さまの前に棄ててみたらば、そうしたら、神の生命がいらっしゃって、そして、

**「神と、父と我とは一つである」**

と。これははっきり、現実を告白しておられた。そういうイエス・キリストという驚くべき神の現象体にぶつかる。

お釈迦さんは、いろいろ修行して最後に悟って、如来とかいう世界に入った。孔子は

「七十にして心の欲する所に従って矩（のり）を踰（こえ）ず」

くらいのところに来た。

イエス・キリストはもう12歳のときからです。神殿で坊さんたちと問答して、桁違いなものだから、坊さんたちが、不思議な子どもだと言った。あそこにあるキリストの言葉に、

**「我は父の家に居ないではいられない」**

と書いてある。この頃の聖書で、「ねばならない」とよく訳してあるが、あの「ねばならない」というのは困ってしまう。「ざるを得ない」世界がある。「ねばならない」ではない。口語訳聖書は弱ったらしくて、私は正直、嫌になってしまうんだ。これを何とかもう一遍大胆に訳さないことには、読んでいて気が抜けてしまう。

どうか、皆さんは、この気の抜けた聖書を、ここに気を入れて読んでいただかなければダメです。

「聖書を読んでいるうちに、気が抜けてしまった」

なんていうのでは、しょうがない。そんな悪口を言って申し訳けありませんけれども、実際、

そういう面がしばしばある。みんな悪いなんて言っているのではない。口語訳でいいところもある。

けれども、本当に

「**居ないではいられない**」

と、キリストはそのようにして神さまに捕らえられた。近頃は、みな「自由、自由」なんて言うけれども、捕らえられた人にならなければダメなんです。それは、「神に憑かれた」と言って、いわゆる狐や何かに憑かれたようなことを言うのではないけれども。

キリストに捕らえられ、捕まえられたら、これが本当に自由なんだ。もう、風の如くに。こないだ、

「風の如く、水の如く、火の如く」

（註：1964/5/17婦選会館での講筵「風の如く」、1964/5/23大阪での講筵「火の如く」）

と申し上げたように、地水火風の如く自由自在な人は、実はこの神・キリストの霊に捕らえられる。

そのようにして、自分の中にキリストの御霊が臨んでまいります。あなた方は聴きながら、私は語りながら、同時にその世界に入っている。そうでしょ。入っていない方があれば、それは頭で受けとっているからです。

「もう、問題はない。何を考えているか。私は、お前の自我というやつを全部すっ飛ばしてしまったから。相変わらずダメだろうと、そんなことは心配いらん」

と、キリストは言われる。

「まだ、ダメでございます」

なんて言ったって、これは死に至るまでダメでございます。

「私は死に至るまで、人間小池はダメでございます」

とはっきり言いますよ。けれども、この人間小池の奥に、ダメでないところのものをいただいているから、私は必ず勝っていきます。私は三日月でも、必ず満月になります。地上ではならなくても、必ずなります。これは神さまの恩寵だから。皆さん一人びとりがそのような事態に進んで行く。

## ●光となり水となる

内側にキリストの光が来たら、さっきの法然のこの言葉は解決できる。

「煩悩は身に添う影で、去らしめんとすれども去るあたわず」

というけれども、内側から光が射したら影はない。太陽に影があるかね。お天道さんに影があるなら、見せてくれ。地球は影を持っているよ。お天道さんは影がないでしょ。光そのものだから。

**「汝らは世の光なり」**

と、キリストは大胆に言われる。

「元来、お前たちは影を持ったものだけれども、私が入れば、光となる」

と。自分自身がどんなに破れ器で影を持っていても、その影を貫いて、ちょうど、いくら雲があっても、太陽の光はそれを貫いてきます。昼間は明るい。

自分自身が即ち光体となったから、もはや影無き人になる。影無き信仰的現実。この信仰の現実は、私は影無き人である。あなた方一人びとりみな影無き人である。相対的現実としての私は相変わらず影を持っています。しかし、それは心配いらん。この信仰的現実の救われたる我というものは影無き人となっている。だから、この煩悩、自我というものに勝てる。

十字架を突破して、突破せしめられて、この聖霊の世界に入ったならば、これは勝利の人である。いくら躓いても転んでも、これはもう勝利の人で、前進せざるを得ない。キリストの力が、キリストの光が、この動力となって、光源体となっていく。

「菩提は水に浮かべる月、取らんとすれども取り得ず」

というが、自分そのものがこの水となる。氷は形をもっている。固い、こわばっている。自我というものにこだわっている人間は氷のごとし。みな形がある。

ところが、キリストの光、太陽の光でもって、氷は融かされてしまう。氷は融けてしまって水となる。もっと熱くなれば、お湯になりますよ。地熱によって温泉が出てくる。地熱から出てくる日本の温泉というものは、人の身体にいろいろよく効くことがある。これは大地の地熱からきているところの、また不思議な大地のいろんな成分をそこに溶かしているところの温泉というものは、それ自身が生命力をもっている。それで人間に効くわけです。

水となり、温泉となる。融けていますから、自由自在ですよね。さらさらと小川のごとく流れたり、また、滝となってもの凄い音をたてて激してみたり。終いには、大海となって、しかも驚くべき塩分を宿して一切のものを浄化してしまうようなものですよ。

これはみんな、キリストの光を受ければ、水の如き存在となって自由自在です。水は方円にしたがって、これに溢れていく。自分のいる世界が四角ければ、四角となって溢れる。丸ければ丸くなって溢れる。くったくがない。

そういうような境地になれば、

「ちゃんと、月はこちらにございます。私は月を宿していますよ」

と。外から月を取ろうとしても取れない。水そのものとなれば、月がちゃんと入っている。これが即ち、御霊の世界です。

そういうようになってきたらば、何を受けとろうが、ちゃんとそれを受けとって、それを消化してしまうし、それをいくらでも活用善用していける。どういうことを見ようが、聞こうが、すべてそれを活かしていくことができる。変質変貌させていくことができる。こ

れは不思議な人です。我々は実に不思議な人になる。もはや、一切の概念で限定することのできない人間になる。これが福音の世界です。

## ●楽しい世界

普通のクリスチャンは信仰に入ると、お題目的に一生懸命で神学的に何か整えてしまう。ご苦労さんだよ、しまいにくたびれてしまうよ、そんな信仰の仕方をしていたら。終いにこわばって、パリサイになってしまって、

「あいつは真実でない」

とか、

「真実である」

とか、人の品定めなんかしている。とんでもない話です。そんなものは信仰でも何でもない。

どうか、皆さんは、もはやプロテスタントにもカトリックにもあらず、本当に使徒たちがこのキリストの霊に掴まれて、そして、本当に証言していたところの事態です。だから、私は

「パウロさん、ヨハネさん、ペテロさん」

と言うんです、親しくなってきたから。私がパウロやヨハネやペテロみたいに偉くなったのでも何でもない。彼らは器は大きかった。私は小さい。けれども、質的には絶対に同じものです。パウロを読もうが、ペテロを読もうが、ヨハネを読もうが、いや実に時々、そのパウロの奥を、ペテロの奥を、ヨハネの奥を掴ませられる。それは御霊が限りなく福音してくださるからです。

そういうわけで、もう楽しくてしょうがない。楽しい世界ですよ、福音の世界は。

**「己を棄て、己が十字架を負いて、我に従え」**

なんていうスローガンを掲げると、

「何かこれは恐ろしいことになってしまった」

なんて思うけれども、恐ろしくはない。驚くべき、力強い、楽しい世界です。だから、

「どんなキリストの激しい言葉でも、いや実にそれは何と易行道であるか。何とそれは実に私たちを力づける言葉であるか」

ということに本当の意味で受けとれる。それを、キリスト教会はみんな逆にとっている。それでもってしゃっちょこばっている。それでは、キリストもパウロも嘆きますよ。

「こんな喜びの音信（おとずれ）をお前さんたちは、なぜ、そんな喜ばしからざる音信にしてしまっているか。また律法にしてしまっているか」

と。偉大な法然さんといえども、私たちはキリストの光の中に入れば、こういう言葉は、楽にその裏側からピシャッと掴まえてしまって、

「影はありませんよ。月はちゃんと取れますよ」

と言える。

「とんでもないやつが出てきたな」

と思うかもしれないけれども。それはキリストが私たちの中に入って、その世界に入れてくださるから、はっきり言えるんです。

## ●分裂のないこと

先程、O君からお話がありましたが、私ももちろん大学の先生として多年経験がございます。学問と福音の問題です。実際、もっと聖書をしっかり勉強したいと思うし、そうかと思うと、学問の方がおろそかになったら困るし、という板挟みで悩んだことがある。またある意味においては、いつまでも悩んでいるとも言えます。けれども、実は、学問することも、あるいは裁縫仕事をすることも、どういうことも、これはみな福音することなんですね、本質的に申しまして。

いつか、お話したかしらんけれども、あの勝海舟が禅の修行して道を行っている。ある青年が海舟のところに来て、

「禅はどういうことでしょか。禅の道を承りたい」

と聞いた。

「そうか、道場に来い」

と、海舟は剣を取って剣道を始めた。そして、

「見てろ」

と。終わってから、

「わかったか」

と。即ち、海舟においては、剣道をなすことそのことが即ち禅である。

剣の道にしても、宮本武蔵にしても、最後は無刃流ということなんです。刀がいらない。柳生流といえども、最後は無刀である。剣を使う最後の境地は、剣の無き世界である。即ち、剣無き世界に本当に入って、無刀となって、相手を倒すくらいなところ。算盤(そろばん)も、無算盤となって、パチパチと頭の中にもう算盤が浮いてくる世界。学問もみなそこまで徹して、学することにおいて即ち福音しているわけです。

マルタが一生懸命でキリストのおもてなしをします。けれども、マリヤが一向に自分を助けてくれないでいるから、

**「イエスさま、マリヤにも私の手伝いをさせてください」**

と言った。マリヤの方は一生懸命でキリストの話を聴いている。キリストは、

**「マリヤは善き方を選んだ。それを取り上げてはいかん」**

と。マリヤは分裂なく聴いていました。マルタも分裂なく働いていればよかったのに、彼女は分裂して、少しは手伝ってもよかろうなんて言った。それでは本当の働きではない。

働くときには徹底的なマルタとなり、聴くときは徹底的なマリヤとなる。

学問するときには、徹底的に学問する。また、伝道するときには、徹底的に伝道できる。そこの切替えは、中心があれば――現実の相対問題としては割り切れないものが、別の面からはありますけれども。しかし、何もそれは学問のことに限らない。私たちの日常生活のすべてがそうです――どのようなことをいたしましても、そこが根底において、福音の力でもって進むときに、それが何も聖書を研究しなくても、その携わる事柄からしてどしどし福音の力が育てられていく。そういう意味において、我々は何をしましても、そこにおいて福音が証しせられていく。そこにおいて福音がいよいよ掘り下げられ、根強くされていくということは、聖書の御言というものを中心にして生きている限り――いわゆる聖書研究というものをしなくても――もうはっきり、御霊の権威をもって自由自在にその学問を通して語ることができる。

## ●一切の秘訣を得たり

そういうわけで、結局、人間のすることはみな相対的なものですから、ある時は、どうしても一切を棄てて、伝道に立たしめられるということはもちろんあります。けれども、それはいわゆる第一線に立とうが、第何線であろうが、実はすべてが第一線です。福音の世界は本質的には全部、絶対の世界です。それでなかったならば、私たちにいわゆる分裂が来たらば――現実の人間はいろんな複雑なもので、割り切れるようなものではないですよ――けれども、その割り切れざる、あるいは分裂しているようなものがあっても、その奥に分裂しないものを持っているならば、そいつをのし上げていくことが、そいつを突破していくことが、またそれを本当に処理していくことができる。既に、O先生やなんかはもう出来ていらっしゃると信じておりますけれども。

そういうわけで、福音の世界は、どの点に向かっても、行くとしてかなわざるはなしです。

**「一切の秘訣を得たり」**

とパウロが言いましたところの事態は――己が本当に十字架において棄てられているというこの自覚。本当に棄てられているというこの自覚。この恩寵の受けとり。絶対無条件に空気を吸っているがごとく、絶対無条件にキリストの十字架を受けとると共に、魂がその生命を呼吸している。そうなりましたならば――そのことは誰もが本当に無条件に受けとられる世界であると申し上げている通りです。

どうか、私たちがいつもこの根源の世界から一切を、一如の世界から限りなく自由自在に展開していくものであるという、この呼吸を忘れないようにしてください。そして、この無私という世界は、認識の世界におきましてもこだわりがなくなるし、力の世界においても、実はこの根源の力がやってくる世界です。

**「麗（うるわ）しき言葉によらず、御霊と力によった」**

というパウロの福音の根底は、それが言葉であろうが、あるいは行為であろうが、すべて実は力なんです。キリストの力、御霊の力、生命の力です。福音は、それであるから、私たちはもう何とも知れずうれしい、楽しい。喜ばしい。一切の悲しみのときに、行き詰まったときに、行き詰まらせないから。

「**為(せ)んかた尽くれども希望(のぞみ)を失わず、倒さるれども滅びず**」

という。そして今度は、いろいろな歴史を見るなり、何を見るなり、いかに世の中が実は神さまに背いていたか。この矛盾不合理はどこから実は来ていたか。しかし、それにもかかわらず、キリスト教は何と現実には無力であるか。それは、キリスト教が無力なのではない。キリスト者が証人証者として無力であるからです。イエス・キリストの福音は絶対に無力なものではない。驚くべき最大の力を持っているものである。

先程、I君も、

「私が動かないで、どうするか」

と言われたように、皆さん一人びとりが本当にその確信に来るんです、この力が来れば。そして、必ず神の国はあなた方一人びとりを通して展開していく。絶対に負けない。数を問題にすることも何もない。質的に本ものを、一人、二人、三人と、神さまはつくってくださる。どうか、神さま、本ものをつくってくださいと。皆さんの存在即使命、使命即伝道ということです。何をやっていましても、それが伝道です。

**「己を棄てる」**

ということが、キリストに在って私たちのまず第一の課題であると同時に、死に至るまで棄てられつつ進んで行く。棄てられつつ進んで行くところに実は、驚くべきものを与えられつつ進んで行く。限りなく与えることのできる人になるわけです、この棄てるという人は。実は、そのようにして棄てられて、自分が棄てることができるという世界に来るんですから、こんなうれしいことはない。そして、それは限りなく与えつつ、限りなく豊かであるという何とも説明のつかない世界です。

イエス・キリストの御言は、みんな私たちを本当に祝福させ、本当の活ける現実に入れる福音の言葉は、絶対に教訓(おしえ)ではない。教えなんていうものではない。これは本当に喜びの言葉である。言葉ではない。事実である、現実であるという受けとり方をしていただきたいと思います。